

新実践者と共に歩む

日本人が派遣できない状況が2年ほど続いています。とはいえ、現場では、今年から共に里山再生を行っていく新実践者という新たな仲間が増えています。今回は、新たに動き出した新実践者の活動を中心にご報告します。

植林の重要性を口にし始めた村人たち

2007年にファナで活動を始めて、16年が経とうとしています。毎日のように薪炭が幹線道路沿いに並べられ、都市に向かう車に積まれていきます。その頃に比べると、周辺の様子も大きく変わりました。幹線道路沿いの土地のほとんどは分譲され、そこに生えていた灌木は根こそぎ掘り取られ、耕作地や宅地になっています。一部の都市住民にとっては、都会の喧騒を離れ、週末を排気ガスのない静かな郊外で過ごす場所にもなっています。

この10年でこの地域の森林資源もかなり減少しているのが、道端に並べられる薪材の太さを見ても分かります。日常的に薪炭を得る灌木林の枝葉の量も年々少なくなり、女性たちも日々の煮炊きに使う薪を得るのに苦労しています。家の柱や日除け屋根を作る太い材などはもはや自然木から得るのは難しく、植樹したユーカリ材に置き換わりつつあります。こうした状況に、以前は、木は勝手に生えてくるからなどと言っていた村人たちから、数十年後には木がなくなるから今から木を育てておかなければならないとの声を聞くようになりました。



灌木林が切払われた幹線道路沿いの分譲地

なぜ今新実践者なのか？

これまで、地域の先駆者である地域苗畑主から技術や経験を学んだ篤農家を、自身の里山での再生活動を通じて、地域の手本となるような存在・「実践者」として育ててきました。初めに研修を受けた実践者は6年以上が経ち、その頃に植えた木々は林になりつつあります。配布した苗木を多くの村人たちが個々に育ててきた点に加え、実践者の育てた小さな面が増えています。

継続して活動している実践者は20名ほど。小さな面をより大きな面にするためにも、さらに多くの村で、さらに多くの村人が、自身で苗木を作り、植え育て、そして利用できるようになってほしいと考えています。身近なところに木を植えて成功している人を見て、自分もと感化される人が出てきています。これまでの実践者の隣村の

関心のある篤農家たちに声をかけて、新実践者として活動をしてもらうことにしました。

経験と知識の共有

新実践者としては、これまでの実践者と同じく自身で苗木を作って、植え育て、使うところまでを目指します。今年は時期的に苗木を作ることから始められなかったため、まずは会が提供した苗木を雨期直前の乾期に植え育てました。その際にマリ人スタッフに先輩である実践者にも同行してもらっています。新実践者と共に作業をする中で、彼がこれまでの活動で培ってきた経験や知識を新実践者と共有してもらうのが目的です。また、隣村という関係性から、共に里山再生を行う仲間として、互いに刺激し合ってもらいたいと考えています。



先輩の実践者が新実践者に植え方を教える

新実践者と先行する実践者との交流

穀物栽培が一段落して収穫を待つまでの手が空いている10月に、新実践者を連れて、先行する実践者の里山へ交流に出かけました。先に述べたように先行する実践者の里山には林ができつつあり、それが将来自分の活動の結果として現れるものだ

と思い描いて欲しいのです。

今回、ジェバ、グンドゥ、ウェラクラなどの実践者（一組はコビリの地域苗畑）を訪れ、新実践者たちは育った林に感銘を受け、育苗や乾期の木の管理など自身が突き当たるであろう様々な事柄に思いを馳せ、活発に質問していました。



活発に質問する新実践者たち

12月からはよいよ新実践者たちの苗畑づくりが始まります。見るのと実際に自分で行うのでは全然違うので、スタッフと先輩実践者にフォローしてもらいながら、苗木作りを始めます。（榎本肇）

マリ生活点描



完成度の高いバイクの模型。作ったのは市場の仕立て屋さんとは、さらに驚き。

学校林の列植、延長！

ファナ地域のラミニブグー小学校では、2019年に学校管理委員会のメンバーである保護者たちが中心となり、サヘルの森からの苗木支援を受けて、幹線道路沿いの学校の敷地に2列のユーカリの列植をしました。金網で囲ったおかげもあり、2年間で5m以上の高さにまで順調に成長しました。



大きく生長したユーカリの列植

今年、村長から今の列植の北側に金網を移動して学校林を延長したいとの要望が届き、委員会のメンバーとマリ人スタッフで作業を行いました。

近年、万が一の事故のために、幹線道路沿いの学校にはコンクリート塀の建設が進んでいますが、この列植は将来的にそれに代わるものとなりそうです。



移設した金網内に保護者が木を植える

日本人スタッフの派遣を見送りました

2021年度の前定では、8～10月と来年の1～2月に日本人を派遣予定でした。

8～10月に関しては、あわよくばという思いでしたが、国内でのワクチン接種が進まなかったことと日本国内の感染状況が厳しかったため、派遣を見送りました。

来年1～2月に関しては、国内の感染状況は落ち着いていますが、オミクロン株という新たな脅威が迫っており、世界的にも感染拡大しています。水際対策が取られていますが、日本国内でも感染が広がりつつあります。効果が期待されるブースター接

種もまだまだ先になりそうです。

さらに、近年経由地としているエチオピアの国内も、反政府勢力の攻勢で混乱しています。

マリの感染状況としては、このところ1日の新規感染者は100人前後で推移しており、日本と変わりなく落ち着いています。渡航による様々な感染リスクなどから総合的に判断して、12月の運営委員会にて、1～2月の日本人派遣については見送ることにしました。

バマコからファナへ

坂場光雄

◆ファナ(ファナ地域)

ファナはバマコから東に 100 km、バマコとセグー方面とを結ぶ幹線道路沿いにあるちょっと大きな町である。サヘルの森の活動では、ファナの町のホテルに宿泊しながら活動するため、この町を含めた周辺 30~50 km圏あたりをまとめてファナ地域と言っている。

◆苗木を荷台に積んで

バマコの朝の道路は自動車とバイクで大混雑である。幹線道路の交差点には交通取り締まりの警官がたくさんいて、やたらと自動車を止めている。

苗木を積んでシートをかけている私たちの自動車は目立つようで、よく止められた。荷台をチェックするだけかと思ったら、交通違反したからと言って、運転手の免許証を取り上げた。自動車を止めて、警察官のところに行き、1000CFAで免許証を返してもらう。このようなことが重なるので、少し時間はかかるが、街中の狭い道を通り、警察官に止められないルートで往来している。

◆ファナ地域に入る

郊外に出ると、道路はすいている。周りは農地や荒廃地で、住居もまばらになる。1 時間ほどでカッセラという町に到着する。ここから 20 kmあまりはファヤ保護林で、樹林地帯である。

ファヤ保護林を抜けると、ザンティギラの町である。この辺りから 50 km、ファナの町の先までがファナ地域の活動地である。幹線道路は東に走っており、道路沿いに小さな町が点在する。

幹線道路の小さな町では毎週 1 回、市が開かれ、農産物や雑貨が売買されている。幹線道路から 10 km以上離れた村からも、歩いたり、ロバ車に乗ったりして、やってくるようだ。市の開かれる日は道路まで人があふれ、荷車、自動車の交通もあって大混雑となる。

町を通り過ぎると、平坦な土地が広がる。小さな起伏もある。交通量は少なく道路は 2 車線が整備されたので、猛スピードで走る自動車も多い。いくつかの町を過ぎて、新しい住宅団地を過ぎると、ファナである。

◆ファナの町と定宿

ファナの町は数キロにわたって常設の小さな店が並んでいる。銀行もある。食堂、ガソリンスタンド、自動車の修理屋、いろいろな商店、軍隊の駐屯地もある。バマコと地方を結ぶバスも止まる。周囲の村と結ぶ乗り合い自動車もある。幹線道路の裏側には区画された住宅地が広がる。しかし住宅地の道路は舗装ではなく、雨が降ると水浸しの泥道となる。

幹線道路から数百 m 入り込んだところに定宿のホテルがある。治安が悪くな

ってからは鉄製の門扉が付けられた。平屋で2棟の宿泊棟、食堂棟がある。部屋数は30余り。門の内部は広い駐車場もあり、周囲には屋根より高く樹木が茂っている。ブドウのような丸い実を付けるペグバ(Lannea microcarpa)、エタージュ(Terminalia mantaly)の列植、カリテ(シアバターノキ)などの高木が生育している。部屋にはベッド、トイレ、シャワー、テレビがついている。テレビは画像が出ないこともある。クーラーもある。水は井戸水である。検査をして安全性が確かめられているのでそのまま飲めるのはありがたい。朝食は食堂で、パンにバター、ジャムを塗りほおぼる。インスタントのコーヒー、紅茶を飲む。テレビはフランスのニュースが流されている。

◆村の土地利用

村は周囲よりちょっと低い場所に立地する傾向が見られる。乾季雨季のある気候の中で農業をするために、少しでも水条件の良いところを選んでいるようだ。このような場所は土壌も比較的よい。住居の分布形態は、集合タイプや分散して離れているタイプなど様々である。

村の住居は日干しレンガである。粘土質の土を掘って型につめ、土のブロックを作って乾かし、積み重ねて部屋を作っていく。屋根は梁となる丸太を渡し、細い枝を渡して、その上を粘土で固めていたが、雨が續くと、溶けてしまうことがあったようだ。最近はトタン板が入手できるようになり、屋根が光っている。

◆シアバターノキが点在する畑

6月になり、雨季が始まると、カラカラだった畑の耕起が始まる。牛に鋤をひかせて土を耕していく。最近は大きな耕運機も見かけるようになった。まだまだ手グワで耕す姿も見かける。作物はソルガム、ミレット、ワタ、落花生など。

畑の中には10mを超えるような樹木が点在している。これはシアバターノキである。7月頃になると、7cmほどの緑色の丸い実を付ける。熟した緑の実は甘くておいしい。シアバターはこの実の中の大きな種から作られる。食用油としても使われ、市場でも売られている。

◆薪炭材の採取場所

村から離れた場所や水条件の悪い場所は樹林であったことが伺えるが、現在はほとんどが低木林、疎林となっている。

ここは日常的に薪炭材の採取場所である。いつまでも樹木が大きくならないと思っていたら、少し大きくなった樹木は伐採されていた。最近はこのような低木林や乾いた樹林地が開墾されて、農地に転換されていた。切り払って燃やしている現場にも出会った。

幹線道路沿いでは地方行政による土地分譲が進められている。バマコ周辺ばかりでなく、ファナ地域でも増えてきた。

試験地として借りていた場所が分譲され、使えなくなったのはこれまでにお知らせしたとおりである。荒廃地の回復試験は新たな場所で継続中である。

青森県八戸市の森林組合に勤める工藤義治さんに、温暖化に伴うニホンジカの北上が地域の林業に与える影響について教えてもらいました

八戸にニホンジカが来た

工藤義治

11月中旬に現場作業員の方からサクラの植林がニホンジカに食害されている可能性があるとの情報が入り、現場の調査に行った。

八戸市森林組合の管轄エリアでは主にネズミやウサギの食害の対策をメインにしてきたが、今回のサクラの被害は過去の経験上見たことが無い症状だった。主な被害は地上から1mぐらいの高さの幹が折られており、形状が悪くなる症状でせつかく大きくなり始めている所に被害を受けていた。7割ほどの被害でかなり執拗に被害を受けている。研究所に調査をして頂いたところ、ニホンジカが特にサクラを好む傾向にあるとの事でした。被害を受けた山林の周囲を歩いてみると今まで見たことが無い程のニホンジカと思われる足跡が多く見られた。青森県ではまだニホンジカによる植林木の本格的な被害は確認されていないが、今後増える事は時間の問題だろう。

現在、伐採後に再び植林をする事が少ない事が問題になっている。ニホンジカによる食害の拡大は、森林所有者に植林意欲の低下をもたらしていることが懸念される。全国的にはヤマビルの分布拡大や、森林の下層植生を食い荒らすことで天然更新ができなくなり、ニホンジカが苦手な草しか生えなくなる例なども知られている。

県内でも徐々に増えていた経緯と爆発的に増えることによって様々な問題が発生する事を知っていたので、私は3年ほど前から狩猟免許を得て狩猟活動を始めた。狩猟グループの新しいメンバーと数カ所にワナを仕掛けて見回りを行っている。

11月15日に早速大きめのオスのニホンジカが捕まった。その3日後には小さ目のメスが捕まった。他にも何頭かいる事を確認したが、捕獲後には徐々に足跡も減り捕まらなくなってきた。足跡の量の割には1頭しか捕まえることが出来なかった。

北海道や岩手県では1頭捕獲につき報奨金を支払う様な事をしており、多くのニホンジカが捕獲されている。青森県や市町村には、このような制度を他県から学んで運用してもらいたい。また、ワナは見回りを仕掛けたら見回りをしないとしないので、若い世代よりも60歳以上の退職をされた方が後継者として良いのではないかと思われる。多くの新しい狩猟者が増える事を期待したい。



捕獲したオスのニホンジカ

グローバルフェスタ(10/9~10)

グローバルフェスタ JAPAN 2021 が 2 年ぶりに開催され、サヘル森も参加しました。今回は、新型コロナウイルス感染症への対策としてリアル（対面）とオンラインのハイブリッド形式での開催でした。リアル会場は東京国際フォーラムで行いました。

興味をもって来訪された方々に現地の活動やバオバブ関係の説明をコロナ禍以前のイベントと同様に行い、持参した我が家のバオバブ盆栽も展示しました。また、記念品としてバオバブの種を無料で配布しました。

例年と異なるのは新型コロナウイルス感染症対策で、マスク着用や消毒等の徹底です。スタッフもブース内 2 名に限定されており、入場パスを渡したりと、少々煩わしいところでした。

学生さんも多く来訪され話を聞いてくれました。先生に紹介されたという農業系の高校生もいました。榎本さんが用意してくれた記念品のバオバブの種も好評で最終日は終了時間前に全て配布を完了しました。バオバブの育て方のチラシも同封されており、なかなか良い出来のものでした。（戸本喜文）



バオバブ盆栽の横で説明

サヘルキャンプ(11/20)

11 月はサヘルキャンプを予定していたが、定例活動の足馴らしを兼ねて、多摩丘陵のウォーキングを行った。10 時 30 分京王模原線の「多摩境」駅に 7 名が集まった。天気は晴れ、気温 20 度の予報。少し涼しい。

◆尾根緑道と鮎道

広い尾根緑道である。この遊歩道は第 2 次世界大戦時に戦車の試験走行道路として 8 km に渡って整備された道路であった。現在は桜が植えられ、遊歩道として利用されている。この辺りもナラ枯れが広がって、大きなコナラの根元に虫に食われた白い粉(フラス)や小さな虫の穴が見られた。公園の西端の山道は、昔は相模川のアユを江戸まで運んだ道だそうで鮎道と言われている。林内にはヤマツツジが咲いていた。大田切池、内裏池を経てサザンカの咲く緑道を進む。

◆鶴見川源流と清水入緑地

尾根緑道から離れて細い山道を進むと道路脇に園地があり、直径 6m ほどの丸い池の中から水が湧き出している。鶴見川はここから 40 km ほど東京湾まで流下している。周辺には住宅が点在している。西に進み清水入緑地の南口に至ると大きなヤマモモのシンボル樹があった。モミジもたくさん植えられているが、紅葉はもう一つで赤くない。

多摩丘陵は大きな開発がなされてきたが、作られた公園緑地、遊歩道の樹木も大きく生育しており、ウォーキング環境としてはよくなってきた。小さな上り下りもあって少し脚の筋肉疲労があったが、天気にも恵まれて楽しめた。（坂場光雄）

国内活動(6月～11月)

<定例活動>

会員交流や植物観察などを目的に毎月第3土曜日を中心に開催を予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、10月まで全て中止としました。

その後、感染が落ち着いたことを受けて、11月20日にサヘルキャンプを行いました。

- ・6/16 庭園美術館、港区郷土資料館
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・7/17 日野ふるさと歴史館と黒川清流公園
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・9/18 平林寺と歴史民俗資料館
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・10/16 区立美術の森と中村かしわ公園
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・11/20 多摩境駅～小山内裏公園～鶴見川源流～南大沢駅
*サヘルキャンプとして実施

サヘルの森会員総会のご案内

総会の日時が下記のように決まりました。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2022年3月27日(日)

14：00～16：30

場所：JICA 地球ひろば

セミナールーム 601/602

(コロナ禍のため定員 18名)

東京都新宿区市谷本村町 10-5

(JICA 市ヶ谷ビル内)

最寄り駅：JR 中央線・総武線「市ヶ谷駅」、

東京メトロ・都営地下鉄「市ヶ谷駅」

- *遠隔地の方も参加できるように会場とオンラインでのハイブリッド開催！
- *施設内の飲食は禁止のため、飲食を伴う懇親会は中止
- *感染状況次第で、書面表決・オンライン開催への変更も検討します。
- *詳細については後日お知らせします。

クリスマス募金のお願い

以前のような平穏な日常の再開を願って、クリスマス募金へのご協力をお願いします。

日本と同様、マリでも新型コロナウイルスの感染者数は比較的落ち着いた状況にあります。一方でワクチン接種率は、残念ながら人口の2%程度と極めて低い水準です。オミクロン株の出現など不安要素も絶えません。

日本人スタッフの派遣予定も見通せない厳しい現状にはありますが、現地スタッフとはリモート形式でやり取りするなど工夫を重ねながら里山再生活動を進めています。

多くの皆様からご協力をいただければ幸いです。同封の振込用紙をご利用下さい。

振込用紙ご記入時のお願い

会費やご寄付でお振込み頂く際、振込用紙に**領収書の要・不要**を必ずご記入ください。

尚、サヘルは寄付等による所得控除の対象になりません。

ご協力のほど、よろしくお願いします。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000 円
- ・維持会員 年 20,000 円

特定非営利活動法人 サヘルの森

住所：〒194-0013

東京都町田市原町田 1-2-3-403

TEL：042-721-1601 (留守電対応)

郵便振替口座：00170-6-115054

HP：<http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>

BLOG：<http://sahelnomor.exblog.jp/>

E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No. 109 2021年12月23日発行
発行人／編集：高津佳史
